方形周溝墓出土の一弥生時代人骨

― 昭和60年度発掘朝日遺跡ＳＺ01号墓３号主体人骨 ―

池　田　次　郎*

愛知県西春日井郡清洲町所在の朝日遺跡では、弥生時代中期から後期にかけて築造された多数の方形周溝墓がこれまでの発掘調査により確認されている。これらの方形周溝墓の主体部から人骨が検出された例も少なくなく、それらのうちいくつかの人骨についての研究報告[1], [2]がすでに公表されているが、いずれも骨質が著しく脆いため骨の復元はきわめて困難で、正確な計測に堪えうる資料は皆無に近かった。

ここに報告する人骨は、昭和60年２月、朝日遺跡60Ｃ区で検出された弥生時代中期末に築造されたＳＺ01号方形周溝墓の３号主体部の人骨で、ほとんど全身骨格を残しており、骨質も堅牢で、土圧による変形が著しいため今回は復元できなかった頭蓋骨以外の骨については、計測値をはじめとする人類学的データを得ることができた。

なお、ＳＺ01号墓の３主体部のうち１号主体部には１体、２号主体部には複数個体の人骨が遺存していたが、いずれも骨の保存状態はきわめて悪い。これらについての所見は省略する。

埋葬姿勢

３号主体部の埋葬施設に関する記載は別稿に譲り、ここでは人骨の配置から推定される埋葬姿勢について述べる（Ｐ65：第２図・Ｐ85：図版１参照）。

遺体は頭を東北東に向け、股関節、膝関節とも伸ばした、いわゆる伸展位で葬られている。次に軀幹部であるが、下位頸椎から第11胸椎までの椎骨は椎体前面を上に向けており、左右肋骨の配列および骨盤の状況とともに被葬者が仰臥姿勢をとっていたことを示しているが、第12胸椎以下第４腰椎までの椎骨は第11胸椎と仙骨に関節している第５腰椎を結ぶ線から左にずれており、第12胸椎、第１～第３腰椎はその右側を、第４腰椎は椎体の上端面を上に向けている。このような位置の乱れは、遺体が白骨化した後に生じたものと考えられ、埋葬時の姿勢が仰臥伸展位であったことは確かである。

頭蓋骨は左側頭部を下にし、顔面を左、斜め上、尾側方向に向けている。下顎骨はその下顎頭を側頭骨の下顎窩に関節した状態にあるが、上・下顎骨の歯列は大きく離れ、しかもずれている。これは、下顎骨が原形を保ち、かつ埋葬時の位置に止まっているのに対し、

＊　京都大学名誉教授・岡山理科大学教授

上顎骨をはじめとする顔面頭蓋骨は土圧のため押し潰され、著しく歪んだためである。また前頭骨の大部分、脳頭蓋骨の正中部および左側の骨は、破片となって内頭蓋底に落ちこんでいる。したがって、埋葬時の被葬者の頭は左側頭部を下にし、顔を左やや斜め上、尾側方向に向けていたが、下顎骨以外の骨が示すほど極端に左を向いてはいなかったはずである。

外側前面を上に向けた左上腕骨は脊柱にほぼ平行で、肘関節では前腕がまがり、橈骨と尺骨は回外位を保ち頭側、内側へ伸び、その遠位端は左の上位肋骨上にある。前腕骨遠位端よりさらに内側、尾側よりに散乱している手根骨、中手骨、指骨は、手根関節で手が折りまげられていたことを示している。

右上腕骨は肩関節で強く内転し、その遠位端は第11胸椎付近にある。前腕は肘関節で強く折りまげられ、橈骨の遠位端およびそれに続く手骨は下顎骨に接しているが、右尺骨は埋葬時の原位置にない。すなわち、肘関節にあるべき尺骨近位端は、左橈骨の近位端近くに、下顎骨付近にあるべきその遠位端が右肘関節付近にある。橈骨と手骨の位置関係から手根関節で手は伸ばされていたとみられる。

左大腿骨は前面を上にして体軸方向に伸び、膝関節では脛骨、腓骨は伸ばされ、その前縁を上に向けている。足根骨、中足骨、指骨などの足骨のうち、距骨は脛骨と腓骨に関節しているが、それ以外の骨は、それより尾側および脛骨遠位部内側に接した所に散乱している。

体軸方向に真直ぐ伸ばされていた左下肢骨と異なり、右下肢骨は斜め左方向に伸ばされている。すなわち、大腿骨はその前面をやや外側に向け、その遠位端は左大腿骨遠位端の内側でそれより高い位置にある。脛骨は膝関節で伸ばされているが、その内側面を上にし、左下腿骨近位部の上を横切り、その遠位端は左下腿骨遠位端の外側で、それとほぼ同じ高さにある。足が距腿関節で背側にまげられた状態で足骨が関節している。

以上の骨の配置から、遺体は仰臥、顔を左上に向け、左肘をまげて左手は胸の上に乗せ、右の肩、肘を強くまげ右手は顎の近くに置かれていた。左脚は真直ぐ伸ばしているが、右脚は脚を組むような形で左脚の上に重ねていた。ほとんどすべての骨は埋葬時の位置にとどまっているが、右尺骨だけが例外で、遺体が白骨化した後、かなり大きく移動している。

人骨の保存状態

胸骨を除くほぼ全身骨格が残っており、いずれも骨質は堅牢で、頭蓋骨以外の体肢骨、とくに下肢骨の保存状態は良好であった。骨の表面には赤味を帯びた黄褐色の物質が固着し、とくに頭蓋骨ではそれらが藍青色の鉱物質の層を挟んで層状に重なっている。これらは、水酸化鉄であり、地下水に含まれる鉄分が付着したものである。

頭蓋骨：左右の上顎骨、頬骨、鼻骨からなる顔面は、右では側頭骨の頬骨突起から乳様突起まで、左では前頭骨の眼窩上縁、左側頭骨、左頭頂骨、後頭骨の左半分へ続いている。これら以外に、下顎骨と、前頭骨、右頭頂骨、後頭骨の破片が存在する。

顔面部は押し潰され変形した状態のまま硬化剤を塗布され、容易に復元することは困難であるが、硬化剤の及んでいない左の側頭骨、頭頂骨、後頭骨、および変形することなく残っていた下顎骨の復元が可能であった。下顎骨の右下顎枝は筋突起と下顎頸を欠損し、残存する下顎頭を下顎枝に接続することはできない。

上顎骨には左右とも第３大臼歯を含む全歯が、下顎骨には左右の中切歯から第２小臼歯までの歯と右第２大臼歯が釘植しており、左の第１・第２大臼歯と右の第１大臼歯の歯槽は閉鎖している。下顎の第３大臼歯は右では萌出していないが、左のそれは脱落しており、その歯槽はきわめて浅く、この歯が生前すでに脱落していた可能性も考えられる。なお、下顎右の第１・第２小臼歯は歯根部だけが残っているが、これが磨耗によるものか、折れて歯冠部を失ったものか、判定できない。

胴骨：尾椎を除く全椎骨が残存する。ほぼ完形をとどめている第２頸椎を別とし、第１頸椎から第１胸椎までの椎骨は破損が著しく、多くは椎体を残すだけである。これに対して第２胸椎から第３腰椎までは完形に近いが、第４・第５腰椎は椎弓の一部もしくは全部を欠く。仙骨は左の外側部を失っている以外、右仙骨粗面などにも欠損部がみられる。肋骨は左右とも残っているが、保存状態は悪く、胸骨は存在しない。

上肢骨：左肩甲骨は外側縁から関節窩下部、肩甲棘基底をへて肩峰に至る部を、右肩甲骨は下角から外側縁、関節窩下部、肩甲棘をへて上角に至る部を残す。左鎖骨は肩峰端と胸骨端の一部を、右鎖骨は肩峰端を欠く。

左上腕骨は、頭、大・小結節、外側上顆などに僅かな欠損部が認められるが、ほぼ完形を保っているのに対し、右上腕骨は近位端およびそれに続く骨体近位部を欠くだけでなく、遠位端および骨体の破損が著しい。左橈骨も環状関節面、茎状突起、手根関節面のそれぞれ一部が破損しているもののほぼ完全であるが、右橈骨は遠位端を欠損する。左右の尺骨は、それぞれ骨体の約⅙、約⅓を失っており、左尺骨の骨体上部の後縁も一部欠損している。

手根骨としては、左右の舟状骨、有頭骨、有鉤骨、左の大菱形骨、右の月状骨、小菱形骨、三角骨、豆状骨が遺存しており、左の大菱形骨と右の有鉤骨が一部破損している以外すべて完全である。中手骨は、左の第３中手骨を除きすべて存在するが、この中、右の第２・第４・第５中手骨以外は破損している。指骨では基節骨は全部、中節骨は左第５中節骨以外すべて認められたが、末節骨の中では左の第１・第２・第４と右の第４末節骨が欠

けている。

寛骨は左右とも腸骨と坐骨はよく残っているが、腸骨隆起および恥骨下枝の一部が破損しているため、残存する恥骨の破片を腸骨、坐骨と接続させることはできない。また左恥骨は恥骨結合面の全部を、右恥骨はその大半を欠いている。

左大腿骨は、頭、頸、大転子、内・外側顆のそれぞれ一部を欠くが、ほぼ完全であり、右大腿骨は、頭、頸、外側上顆、内・外側顆のそれぞれ一部と大転子の大部分を欠くなど、左より欠損部が多いが、それでも残りはよい。左右の膝蓋骨は、ともに膝蓋骨尖の後面を欠損する。左脛骨は、上関節面の前部から脛骨粗面の上部にかけて破損しており、右脛骨は上関節面、脛骨粗面のごく一部を欠くだけで完形に近い。左腓骨は、近位端を欠き、骨体近位部も破損しているのに対し、右腓骨は骨体近位部約3/4を欠いている。

左第３楔状骨以外の足根骨はすべて存在し、しかも右距骨がその距骨後突起の内側結節を欠く以外、すべて完全である。中足骨は左右ともすべて遺存するが、指骨の中で残っているのは、左の第２、右の第３基節骨と、基節骨の小破片１片だけである。

性、年齢の判定

保存良好の寛骨の形態から男性と判定されるが、男性的特徴はそれほど顕著でない。

年齢推定に最も有効な恥骨結合面は、左では欠損し、右でもその大半を欠いているので、これを利用することはできない。上下顎歯の歯冠の磨滅度をみると、上顎左の第１大臼歯と右の第１・第２大臼歯の咬耗は歯頸部まで達しており、小臼歯の磨滅もかなり進んでいる。下顎左の第１・第２大臼歯と右の第１大臼歯の歯槽は閉鎖しているが、上顎左の第２・第３大臼歯、右第３大臼歯の磨耗が軽微で、かつそれらの歯が下方に突出していることは、下顎大臼歯、とくに左の歯槽閉鎖がかなり早い時期に完了したことを示しており、小臼歯の強い磨滅もそのためと考えられる。

次に頭蓋縫合のうち、癒合度が観察できた左の人字縫合についてみると、その内板はもとより外板においてもほぼ全域にわたって縫合は消失しており、また後頭乳突縫合の癒合もほとんど完了している。これら縫合癒合の程度から、被葬者は熟年後半から老年と推定されるが、椎骨椎体や四肢長骨骨端に骨増殖が認められないこと、下顎骨にみられた歯槽閉鎖や小臼歯の強い磨耗は下顎大臼歯の早期脱落に起因すること、縫合癒合の進行の個体差などを考慮すれば、被葬者の死亡時年齢は歯や縫合から推定される年齢よりは若く、壮年後半から熟年前半にかけてであったと推定される。

人骨の計測的、非計測的特徴

朝日ＳＺ01男性の下顎骨、四肢長骨の計測値と示数を第１表～第５表に示す。比較のために、山口県土井ヶ浜遺跡の弥生前期人骨、(3), (4)愛知県吉胡貝塚の縄文晩期人骨(5), (6), (7)および近畿現代人骨(8), (9), (10)の数値を表に加えたが、これらはいずれも男性骨で、四肢長骨の場合には左を用いている。

頭蓋骨(第１表)：すでに述べた通り、脳頭蓋は復元できないので計測値を知ることはできない。乳様突起は小さく、項線の発達も弱く、男性骨としてはきゃしゃである。左右の舌下神経管は単一で、外耳道骨腫は認められない。歪んでいる顔面頭蓋も計測できないが、上顔高は明らかに低い。

下顎骨の計測値の中では、下顎角幅、下顎枝高、前枝高、下顎頭高など下顎枝に関係する計測値が著しく小さく、オトガイ高も吉胡縄文人とともに小さいが、他の計測値は中程度である。下顎枝高が低いため下顎枝示数は大きい。下顎切痕示数は土井ヶ浜弥生人、近畿現代人より小さく、吉胡縄文人に近い。軽度の角前切痕が認められる。咬合型式は鉗子状と推定され、風習抜歯は施されていない。

上肢骨(第２表・第３表)：鎖骨の計測値は吉胡縄文人、近畿現代人と大差なく、骨体断面示数は縄文人と現代人の中間に入る。右鎖骨の肋鎖靱帯圧痕はやや強い。上腕骨は細長く、きゃしゃである。すなわち、最大長、全長は縄文人、現代人だけでなく、土井ヶ浜弥生人より長いのに対し、骨体周径、中央最大径・最小径はいずれも小さく、また上端幅、下端幅、頭最大矢状径など骨端部計測値も小さい。したがって、長厚示数は最小である。中央最小径が著しく小ないため、骨体断面示数は吉胡縄文人よりさらに小さく、その著しい扁平性を示す。顆体角と捻転角が大きく、三角筋粗面の発達は弱いが、橈骨神経溝は深い。

橈骨も上腕骨同様、細長く、きゃしゃである。最大長、生理長とも著しく長く、骨体の周径と横径は小さく、長厚示数は極端に小さい。骨体横径が小さいため、骨体断面示数は大きく、骨体弯曲は弱い。大きな橈骨上腕骨示数は吉胡縄文人の数値に近い。尺骨骨体の横径、上横径の大きさは中程度であるが、前後径、上前後径が小さいため、骨体断面示数は著しく小さく、扁平示数は吉胡縄文人と同程度に大きい。回外筋稜、尺骨粗面は強く、また深指屈筋起始部の付着部は深く凹んでいる。

下肢骨(第４表・第５表)：大腿骨は上腕骨同様、細長いが、その程度は上腕骨ほど著しくない。最大長は縄文人、現代人より大きく、土井ヶ浜弥生人の平均値と一致し、中央周は縄文人、弥生人より小さいが、現代人より大きく、長厚示数は現代人、弥生人よりやや小さい程度にとどまっている。骨体中央の矢状径は縄文人、弥生人より小さく、現代人に近いが、横径はいずれより大きく、そのため中央断面示数は現代人をはるかに下まわる。これに対して上骨

体断面示数は縄文人、現代人より小さく、土井ヶ浜弥生人と大差なく、扁平である。大腿骨頭の垂直径、横径、周径はいずれもやや小さいが、外顆、内顆の各径は土井ヶ浜弥生人とともにやや大きい。骨体の弯曲は弱いが、頸体角、顆体角、捻転角は他と大差ない。大腿骨が上腕骨に比し相対的に頑丈であることは上腕骨最小周の大腿骨中央周に対する比率が著しく小さいことでも明らかで、比較３集団中最小の土井ヶ浜弥生人をさらに下まわる。また、殿筋粗面や粗線は強いが、中央断面示数が示すように柱状性は弱い。膝蓋骨は高径、幅径ともに小さく、細長いが、厚径は大きい。

脛骨は大腿骨と異なり、著しく細長く、上肢、下肢長骨のうち最もきゃしゃである。その最大長は縄文人、現代人はもとより、大腿骨最大長ではほぼ同程度であった土井ヶ浜弥生人よりはるかに長い。その結果、脛骨大腿骨示数、あるいは脛骨最大長の大腿骨最大長に対する比率では吉胡縄文人とともに大きい。骨体の中央および栄養孔部における最大径、横径、周径、さらに最小周が著しく小さいため、長厚示数も小さく、３集団中これに近いのは土井ヶ浜弥生人である。中央断面示数は、左では著しく小さいが、右では逆に大きく、脛示数すなわち栄養孔の位置における断面示数は厚型に属し、縄文人、弥生人より大きく現代人と一致する。骨体の弯曲はやや強く、縄文人に近いが、後傾角と傾斜角は小さく土井ヶ浜弥生人に、捻転は弱く現代人に似た数値を示す。骨間縁は鋭いが、ヒラメ筋線は弱く、遠位骨端に著明な蹲踞面は認められない。腓骨の骨体中央における諸径は、土井ヶ浜弥生人とともに縄文人と現代人の中間に位置し、中央断面示数も弥生人に最も近い。

左の大腿骨最大長から推定される身長は、ピアソン式で163.8cm、藤井式で163.3cmと算出され、高身長である。

以上、朝日ＳＺ01号男性骨の最も顕著な特徴として、高身長、男性骨としてはきわめてきゃしゃである点を挙げることができる。とくに四肢長骨はいずれも著しく長く、細いが、大腿骨および腓骨が比較的頑丈であるのに対し、脛骨は著しくきゃしゃである。土井ヶ浜弥生人、吉胡縄文人、近畿現代人との比較において、朝日ＳＺ01号人骨は、大腿骨の長厚示数、上骨体示数、遠位端の大きさ、中央周の上腕骨最小周に対する比、脛骨の長厚示数、後傾角、傾斜角、腓骨の中央径など下肢骨に土井ヶ浜弥生人に類似する特徴が認められるが、大腿骨中央断面示数や脛示数では近畿現代人に近く、橈骨上腕骨示数と脛骨大腿骨示数では吉胡縄文人と同様、前腕、下腿が相対的に長いという縄文時代人特有の特徴も示している。

他地域の弥生人骨との比較

弥生時代の中期から後期にかけて築造された方形周溝墓の主体部に被葬者の遺骨が遺存

していた例は、これまでのところ数遺跡を数えるに過ぎない。朝日遺跡では本資料が出土したＳＺ01号の１号、２号主体部のほか６例が報告されているが[1],[2]それ以外には東大阪市の瓜生堂遺跡[11]巨摩廃寺遺跡[12]山賀遺跡[13]八尾市亀井遺跡[14]神戸市玉津田中遺跡[15]および愛媛県釈迦面山遺跡[16]が知られているだけである。粘土でおおわれた箱式石棺内に埋葬されている釈迦面山遺跡を別とすれば、木棺に埋納されている方形周溝墓被葬者の遺骨は、その埋葬施設の性格上残存しにくいと考えられ、上記の遺跡の場合は方形周溝墓自体あるいは木棺だけが長期間にわたって水に浸っていたために遺骨が残ったと思われる。しかし、これらの人骨も水分の多い土中に埋っていたため、いずれも骨質が著しく脆く、人類学的研究に堪える状態にまで復元することは困難である。本資料は、大半の四肢長骨が復元でき、その特徴を知ることができた方形周溝墓出土人骨として釈迦面山人骨とともに貴重であり、また九州、山口地方以外の地域では出土例の少ない弥生人骨資料としても重要である。

朝日遺跡から出土した人骨は、これまでに９例が報告されているが[1] [2], [17]そのうちある程度の特徴が判明しているのは７例で、それらは弥生時代中期の土壙墓出土の１例を除き、中期、もしくは後期前半の方形周溝墓から出土した人骨である。７例中３例が男性、４例が女性であるが、その推定身長は男性で169cm、162cm、女性で155cm、156.4cm、155cm前後といずれも高身長で、ＳＺ01号を含む朝日弥生人が高身長をその特徴としていることは確かである。身長以外の特徴として、女性２例の頭蓋長幅示数が長頭ないし中頭であること、男性１例の大腿骨、脛骨の扁平性が弱いことが明らかにされ、それらの特徴は古墳時代人的特徴を濃厚に示しているという見解が提出されている[1]。

朝日遺跡以外の東海地方の弥生人骨としては、朝日遺跡に隣接する貝殻山貝塚出土の弥生前期人骨２体[18]名古屋市熱田高蔵貝塚で発掘された熟年男性骨２体[19]が報告されている。貝殻山人骨は２体とも男性で、そのうち１体の左上腕骨から算出された推定身長は160cm、他の１体もそれと同程度とみられているので、これも高身長の部類に入る。

大正初年に発掘された高蔵貝塚人骨は、日本人種論の学史上、見逃すことができない資料である。低顔、頑丈な顎骨、短く太い四肢長骨という特徴が明らかにされながら、結論としてはアイヌより現代日本人に類似するとされ、当時のアイヌ説を補強するのに大きな役割を果した。左上腕骨からピアソン式で算出されるその推定身長は152.0cm で著しく低く、この点で朝日、貝殻山弥生人骨とは異なる。しかし、その四肢骨の頑丈性は、朝日ＳＺ01号人骨にくらべれば確かに強いが、西日本の弥生人骨に比し特に顕著であるとはいえない。高蔵貝塚からは、この２体以外に３体が大正８年に清野謙次により発掘され、それらは未報告に終っているが、そのうちの壮年男性骨１体の上腕骨、大腿骨、脛骨の計測値は、佐藤が報告している高蔵人骨の数値によく似ている。

朝日ＳＺ01号人骨を含む東海地方の弥生人骨は、高蔵を別とすれば高身長で、計測値は得られていないが、朝日ＳＺ01、ＳＺ021、高蔵は低顔と推定されている。SZ01号の骨格、とくに四肢長骨がきわめてきゃしゃであるのは、この個体特有のものであり、東海弥生人の集団特徴を代表するものではないことを念頭に置き、朝日ＳＺ01号人骨の特徴を他地域、とくに一遺跡から多数の弥生人骨が出土している九州、山口地方の資料と比較する。

比較に用いた資料は、いわゆる渡来系弥生人といわれている山口県土井ヶ浜遺跡[3],[4]吉母浜遺跡[20]中ノ浜遺跡[21]福岡市金隈遺跡[22]佐賀県三津遺跡[23]二塚山遺跡[24]など北部九州・山口地方の弥生人骨と、縄文人的色彩を濃く残しているとされる佐賀県大友遺跡[25]長崎県深堀遺跡[26]宮の本遺跡[27]など西北九州の弥生人骨、さらに１例ではあるが方形周溝墓から出土した愛媛県釈迦面山遺跡の保存良好な弥生中期人骨[16]である。釈迦面山人骨の特徴は、西北九州タイプとされている。これら遺跡から出土した下顎骨、四肢長骨の計測値を第６～９表に示したが、いずれも男性、四肢骨は左側の数値である。

下顎骨計測値（第６表）では、朝日の下顎角幅は著しく小さく、比較集団中最小であるのに対し、その下顎長は大きく、土井ヶ浜、吉母浜、深堀に近いが、釈迦面山より小さい。オトガイ高、枝高、枝幅はいずれも小さく、この点で深堀、釈迦面山に近く、大きな下顎枝示数は釈迦面山と同程度である。このように朝日の下顎骨計測値は全体として釈迦面山人骨に最もよく似ている。

上肢骨計測値（第７表・第８表）についてみると、鎖骨が比較できた資料は僅かであるが、朝日の鎖骨計測値は同地域の高蔵、北部九州の三津に近く、釈迦面山より大きい。朝日の四肢骨は著しく長く細い点を最大の持徴としているが、上腕骨の最大長は比較集団中、中ノ浜に次いで長く、中央部の最大径、最小径、周径および最小周は、釈迦面山を除き最小である。したがって長厚示数も釈迦面山に次いで小さく、中ノ浜より僅かに大きい。朝日人骨の特徴の一つである上腕骨骨体の扁平性をあらわす骨体断面示数は釈迦面山を除き朝日が最も小さく、それよりやや大きいのが金隈、高蔵、吉母浜であるが、他ははるかに大きい。骨体の頑丈性が弱く、扁平性が強い点で朝日人骨は釈迦面山人骨によく似ている。

朝日の橈骨最大長は、１例の三津よりは短く、中ノ浜に一致するが、それ以外の集団より大きく、最小周は最も小さい。その結果、長厚示数も最小で、中ノ浜、三津がこれに次ぐ。釈迦面山の最小周は計測されていないが、その骨体横径、矢状径から朝日に匹敵するほど細いものと推定される。骨体矢状径、中央矢状径は比較集団と大差ないが、骨体横径、中央横径は最小で、そのため骨体断面示数、中央断面示数は最大値を示し、骨体の扁平性は弱い。釈迦面山の骨体断面示数は吉母浜とともに最も小さく、この点で朝日人骨とは異なり、朝日に最も近いのは中ノ浜の中央断面示数である。各集団の平均値から算出した橈

骨上腕骨示数を比較すると、朝日の数値は１例の三津を除き最大で、中ノ浜、大友がこれに次いで大きい。朝日の尺骨前後径は小さく、横径は中程度で、骨体断面示数は中ノ浜に次いで小さい。なお、この示数は、西北九州弥生人で大きく、吉母浜を除く北部九州・山口弥生人で小さいが、朝日は高蔵とともに後者の範囲内にある。

下肢骨計測値(第９表・第10表)についてみると、朝日の大腿骨最大長は二塚山、金隈、土井ヶ浜など北部九州・山口地方の各集団とともに大きく、西北九州の大友よりはるかに長い。資料数はそれぞれ２例、１例ではあるが、山口地方の吉母浜は比較集団中最も小さく、西北九州の宮の本が最大であるのはその例外である。中央周では朝日、釈迦面山、宮の本が最小グループを形成し、土井ヶ浜を除く北部九州・山口のいずれよりもはるかに小さく、土井ヶ浜、大友、高蔵はその中間に入る。その結果、朝日の長厚示数は比較集団中最も小さいが、宮の本とほぼ一致し、三津以外の他集団との差もそれほど著しくない。

松下[27]は、西北九州の宮の本弥生人の上肢骨、とくに上腕骨が太く頑丈であるのに対し下肢骨、とくに大腿骨は著しくきゃしゃであるが、佐賀平野の二塚山弥生人の上腕骨と大腿骨の関係は宮の本の場合と全く逆であるという興味深い提言を行った。その後、内藤[28]は、上肢骨と下肢骨の関係について、西北九州弥生人は宮の本と三津の弥生人は二塚山と同様それぞれ上腕骨と下肢骨が相対的に頑丈であるが、土井ヶ浜弥生人は上肢、下肢骨ともに著しく細く、きゃしゃであると追加している。さらに、中橋ら[22]は、上腕骨と大腿骨の頑丈性を比較するため、上腕骨最小周の大腿骨中央周に対する比を各集団の平均値から求めて比較した。その結果、男性では三津、二塚山、金隈など北部九州の甕棺人骨の数値が小さく、大友、宮の本など西北九州弥生人のそれは津雲、吉胡など縄文後晩期人とともに大きく、顔面形態や身長などの点で三津、二塚山、金隈と同一群に入る土井ヶ浜と島根県古浦の弥生人骨が、この点ではむしろ大友や縄文人に近い傾向を示すことを明らかにした。

朝日人骨の大腿骨が上腕骨ほどきゃしゃでないことは既に述べたが、それは計測値だけでなく、上腕骨の三角筋粗面、大腿骨の殿筋粗面や粗線など筋付着部の発達程度をくらべても明らかである。また上腕骨最小周と大腿骨中央周の比でも朝日の数値は吉母浜、金隈、三津など大腿骨が相対的に頑丈なグループに入る。なお、東海地方の高蔵の数値も小さいが、西北九州タイプとされている釈迦面山が比較集団中、最小の数値を示している点も注目される。

大腿骨中央の横径は、他集団と比較しそれほど小さくないが、その矢状径は釈迦面山とともに著しく小さい。そのため朝日の中央断面示数は釈迦面山に次いで小さく、これに吉母浜、高蔵が続く。骨体上部の横径、矢状径とも小さく、上骨体断面示数は三津、中ノ浜、二塚山ほどではないが大きい方で、大友、土井ヶ浜などに近い。なお、この示数では、

釈迦面山が極度に小さく、宮の本、高蔵も小さい。

全般的に細長い朝日の四肢長骨の中で、比較的頑丈な大腿骨とは対照的に、最もきゃしゃな骨が脛骨である。その最大長は比較集団中最大で、骨体中央部周径は釈迦面山より僅かに大きいが、栄養孔部周径、最小周とともに最も小さく、その結果、長厚示数も最小値を示す。大腿骨と脛骨の頑丈性を比較するために、脛骨骨体周と大腿骨中央周の比率を各集団の平均値から計算すると、九州・山口地方の弥生人の数値が90以上であるのに対し、朝日は86.9で、釈迦面山の85.5に近く、朝日の脛骨が釈迦面山とともに著しくきゃしゃであることが明らかである。なお、ヒラメ筋線など筋付着部の発達の程度も、朝日の脛骨が、きゃしゃであることを示している。

前腕骨や下腿骨が相対的に長いという縄文人骨の特徴は、古くから津雲人について指摘されているが[29]・[30]　山口[31]はこれを狩猟採集生活と関連させている。朝日の橈骨上腕骨示数および脛骨大腿骨示数、とくに後者が著しく大きく、吉胡縄文人に一致することはすでに述べたが、中橋ら[22]は各集団の平均値から求めた脛骨最大長の大腿骨最大長に対する比率を、九州・山口地方の弥生人の間で比較している。その結果、大友は縄文人に匹敵するほど大きいが、古浦、金隈、三津、二塚山など北部九州・山口タイプの弥生人は縄文人や大友より小さいことが明らかにされている。朝日の数値は大友に次いで大きいが、土井ヶ浜にも近い。

脛骨の骨体中央部および栄養孔の位置における最大径と横径を比較すると、朝日はほとんどすべての項目で最小値を示し、釈迦面山は朝日に次いで小さい。両径の比のうち栄養孔部における脛示数では、朝日は北部九州・山口地方弥生人とともに西北九州弥生人より大きく、釈迦面山も前者の範囲内にある。これに対して、中央断面示数では朝日は比較集団の中で最小値を示すが、その右脛骨の示数(76.9)は著しく大きいので、朝日の脛骨の扁平性は特に強いとはいえない。なお、この示数でも釈迦面山は西北九州集団より北部九州山口集団に近い。

腓骨骨体中央部の各径でも、朝日の数値は釈迦面山に次いで小さく、中央断面示数では北部九州・山口地方弥生人とともに釈迦面山および宮の本より小さい。

大腿骨最大長を用いピアソン式で算出した朝日の推定身長163.8cmは、比較集団中、二塚山に次いで高く、北部九州・山口地方弥生人および島根県古浦(165.8cm)の範囲内にあり、大友、西北九州弥生人(158.8cm)との間にはかなり大きな差が認められる。

以上、朝日人骨、とくにその四肢長骨計測値を渡来系とみなされる北部九州・山口地方弥生人と在来系といわれる西北九州弥生人と比較した結果、高身長を始めとし多くの特徴で北部九州・山口地方弥生人に類似するが、一方、橈骨、脛骨が相対的に長いなど、縄文

人的特徴においては西北九州弥生人に近く、また大腿骨に比し著しくきゃしゃな脛骨をもつ点ではいずれのタイプとも異なっていることが明らかにされた。

朝日の四肢骨計測値、示数に類似する数値は、四国の釈迦面山人骨に最も多くあらわれている。著しくきゃしゃな上・下肢骨、頑丈性が弱く、扁平性が強い上腕骨、相対的に頑丈で、柱状性が弱い大腿骨、大腿骨に比し著しくきゃしゃで、扁平性の弱い脛骨などがそれであるが、そのうち、極度に細い脛骨は、北部九州・山口地方・西北九州地方いずれの弥生人骨にも見られない特徴である。全四肢骨の長経、橈骨および大腿骨上部の扁平性など、朝日と釈迦面山との間で必ずしも一致しない特徴が存在することも事実であるが、両者の間の類似点は相異点よりはるかに多く、しかもそれらの特徴の多くは西北九州弥生人よりも北部九州・山口地方弥生人に通じるものである。しかし四肢骨形態の類似を集団間の系統関係に結びつけて論じるのには問題がある。

四肢骨の頑丈性、とくに上肢骨と下肢骨の相対的頑丈性は、縄文時代では早前期人と後晩期人[32]あるいは山間部住民と海岸居住者の間[33]に差があることが指摘され、その要因として、栄養条件その他の環境要因が重視されている。また、西北九州弥生人の頑丈な上腕骨は彼らの漁撈生活と、三津弥生人の頑丈な下肢骨はその農耕生活と関連するという推論[28]も提出されている。

山口[16]は、釈迦面山弥生人骨は低身低顔など縄文人の特徴を有し、西北九州弥生人と同様に、土着集団と考えられるが、その四肢骨の細さ、大腿骨の非柱状性、脛骨の非扁平性などの非縄文人的特徴は、繊細化への時代的変化が下肢骨に強くあらわれたものと、これを小進化の一環として捉えている。

朝日人骨、釈迦面山人骨はともに１例ずつであり、その特徴は必ずしもそれぞれの地域の弥生人集団を代表しているとは限らないが、両者の類似は、ともに弥生時代中期の方形周溝墓から出土しているという点からも興味深い。

ＳＺ01号人骨を始めとする朝日遺跡出土の弥生人骨はいずれも高身長で、この点では北部九州・山口地方弥生人の範囲に入る。またＳＺ01号の四肢骨には、これら渡来系集団に通じる特徴が認められるが、これを根拠に朝日弥生人を渡来系集団に帰属させるわけにはいかない。その結論は頭蓋骨とくに顔面形態が正確に把握しうる資料が、今後、東海地域で追加されるまで待たなければならない。また、四肢骨の相対的頑丈性の時代的変化と地域的変異の実態とその要因の解明が、今後の弥生人研究を進める上で大きな課題の一つであることを指摘しておきたい。

本資料を調査する機会を与えて頂いた愛知県埋蔵文化財センターの各位に感謝の意を表わしたい。

〔注〕

(1) 江原昭善・木下　実　1982　朝日遺跡出土の人骨について．「朝日遺跡　Ⅰ（本文編　1）」pp. 249－256．愛知県教育委員会．
(2) 江原昭善・木下　実・松本　眞　1984　ＳＺ021出土の人骨について．「環状２号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ－昭和58年度」pp. 142－145．愛知県教育サービスセンター．
(3) 大堀正俊　1958　山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生式前期人骨の下顎骨に就いて．人類学研究、5；87～151．
(4) 財津博之　1956　山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就いて．人類学研究、3；320～349．
(5) 金高勘次　1928　吉胡貝塚人々骨の人類学的研究．第１部　頭蓋骨の研究．人類学雑誌、43、附録：497～736．
(6) 大場秀夫　1935　吉胡貝塚人々骨の人類学的研究．第４部　上肢骨の研究．人類学雑誌、50、第９附録、pp．89．
(7) 石沢命達　1931　吉胡貝塚人々骨の人類学的研究．第３部　下肢骨．其一　大腿骨、膝蓋骨、脛骨及腓骨の研究．人類学雑誌、46、附録：１～192．
(8) 宮本博人　1924　現代日本人人骨の人類学的研究．第１部　頭蓋骨の研究．人類学雑誌、39：307～451．
(9) 宮本博人　1925　現代日本人人骨の人類学的研究．第２部　上肢骨の研究．人類学雑誌、40：219～305．
(10) 平井　隆・田幡丈夫　1928　現代日本人人骨の人類学的研究．第４部　下肢骨の研究．其一　大腿骨・膝蓋骨・脛骨及腓骨に就て．人類学雑誌、43、附録：１～82．
(11) 池田次郎　1980　瓜生堂遺跡方形周溝墓出土の人骨について―1978～1979年度．「瓜生堂－本文編」pp. 449－450．大阪府教育委員会・大阪文化財センター．
(12) 池田次郎　1981　瓜生堂・巨摩廃寺遺跡方形周溝墓出土の人骨について．「巨摩・瓜生堂－本文編」pp. 309～315．大阪府教育委員会・大阪文化財センター．
(13) 大阪府文化財センター編　1983　「山賀（その２）」p.67．
(14) 大阪府文化財センター編　1982　「亀井遺跡」p.64．
(15) 未報告
(16) Yamaguchi B.　1979　A human skeletal remain of Yayoi period from Shakameyama site, Ehime Prefecture, Shikoku. Bulletin of the National Science Museum, Series D (Anthropology), 5：13－30．
(17) 江原昭善　1975　朝日遺跡群出土人骨について．「環状２号線関係朝日遺跡群第一次調査報告」pp. 100－105．愛知県教育委員会．
(18) 寺門之隆　1972　人骨の鑑定．「貝殻山貝塚調査報告」p.23．愛知県教育委員会．
(19) 佐藤亀一　1918　尾張国熱田の貝塚より得たる日本石器時代人骨に就て．人類学雑誌、33：309－349．
(20) 中橋孝博・永井昌文　1985　山口県下関市吉母浜遺跡出土の弥生・中世人骨．「吉母浜遺跡」pp. 154－225．下関市教育委員会．
(21) 中橋孝博・船越公威・永井昌文　1985　山口県中ノ浜遺跡第９次調査出土人骨．「中ノ浜遺跡、第９次発掘調査概報」pp. 25－38．豊浦町教育委員会．
(22) 中橋孝博・土肥直美・永井昌文　1985　金隈遺跡出土の弥生時代人骨．「史跡　金隈遺跡」pp. 43－145．福岡市教育委員会．
(23) 牛島陽一　1954　佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生時代人骨の人類学的研究．人類学研究、１：273－303．
(24) 松下孝幸　1979　二塚山遺跡出土の弥生時代人骨．「二塚山」佐賀県文化財調査報告書第46集．pp. 242－255．佐賀県教育委員会．
(25) 松下孝幸　1981　大友遺跡出土の弥生時代人骨．「大友遺跡」呼子町文化財調査報告書第１集．pp. 223－253．呼子町教育委員会．

(26) 内藤芳篤・栄田和行　1967　人骨．「深堀遺跡」人類学考古学研究報告第1号．pp．87－94．　長崎大学医学部解剖学第2教室．
(27) 松下孝幸　1981　宮の本遺跡出土の人骨．「宮の本遺跡」佐世保市埋蔵文化財調査報告書昭和55年度．pp．93－109，114－118，145－146．佐世保市教育委員会．
(28) 内藤芳篤　1981　弥生時代人骨．小片保編「人類学講座5　日本人Ⅰ」 pp．57－100．　雄山閣出版、東京．
(29) 清野謙次　1929　津雲石器時代人の身長と身体各部比例．史前学雑誌．1：221－288．
(30) 岡本辰之輔・関　政則　1930　日本石器時代人々骨（津雲貝塚人々骨）身体各部比例に就て．人類学雑誌、45：51－78．
(31) 山口　敏　1981　縄文時代人骨．シンポジウム「骨からみた日本人の起源」季刊人類学、12(1)：38－50．
(32) 小片　保　1973　縄文人の形質序説．どるめん、1：22－33
(33) 池田次郎　1985　海と山の縄文人－形態の地域差と時代差－．「日本史の黎明」 pp．29－56．　六興出版、東京．

第1表　下顎骨の計測値と示数

		朝日 SZ・01	土井ヶ浜	吉胡	近畿
		弥・中	弥・前	縄・晩	現代
66	下顎角幅	90	106.8(42)	103.7(33)	100.5(30)
67	前下顎幅	48	48.3(56)	49.1(61)	45.9(30)
68	下顎長	76	76.0(42)	77.0(36)	73.4(30)
69	オトガイ高	30	33.3(47)	29.4(34)	36.5(29)
69(1)	下顎体高	32	31.6(54)	30.4(59)	33.6(30)
69(3)	下顎体厚	13	13.0(58)	13.1(65)	12.7(30)
70	枝高	54	62.2(45)	61.8(22)	61.0(29)
70(1)	前枝高	55	63.1(51)		64.8(30)
70(3)	下顎切痕高	13	14.5(44)	13.1(19)	15.1(30)
70a	下顎頭高	50	55.9(41)		
71	枝幅	34	36.4(54)	34.2(45)	33.5(28)
71a	最小枝幅	34	36.3(57)		
71(1)	下顎切痕幅	36	36.1(44)	37.5(20)	37.3(29)
79	下顎角	122	123.9(43)	120.9(38)	123.3(29)
69(3)／69(1)	下顎体高厚示数	40.6	41.4(53)	43.9(59)	38.4(29)
71 ／70	下顎枝示数	63.0	58.5(44)	55.5(21)	56.2(28)
70(3)／71(1)	下顎切痕示数	36.1	40.2(44)	35.6(19)	40.6(29)

（　）内は資料数

第2表　鎖骨、上腕骨の計測値と示数

		朝日 SZ・01		土井ヶ浜	吉胡	近畿
		弥・中		弥・前	縄・晩	現代
鎖骨		左	右	左	左	左
4	中央垂直径	10	11		10.0(18)	10.4(30)
5	中央矢状径	13	13		14.1(18)	12.2(30)
6	中央周	37	39		40.3(18)	37.7(30)
4／5	骨体断面示数	76.9	84.6		71.3(18)	86.8(30)
上腕骨						
1	最大長	311		299.4(15)	283.1(27)	292.5(30)
2	全長	307		295.4(14)	278.9(27)	288.5(30)
3	上端幅	43		49.0(16)	49.2(27)	45.8(30)
4	下端幅	54		60.5(23)	59.6(27)	58.4(30)
5	中央最大径	21	22	22.6(53)	24.7(25)	22.0(30)
6	中央最小径	15	16	17.2(54)	18.1(25)	17.0(30)
7	最小周	59		64.5(53)	66.6(42)	63.9(30)
7a	中央周	62	63		72.1(25)	65.5(30)
10	頭最大矢状径	40		43.3(14)	44.8(24)	42.8(30)
16	顆体角	85		81.6(26)	83.7(37)	82.3(30)
17	頭体角	46		48.2(16)	44.1(21)	45.1(30)
18	捻転角	160		150.5(12)	141.7(20)	150.8(30)
7／1	長厚示数	19.0		21.3(17)	23.8(27)	21.9(30)
6／5	骨体断面示数	71.4	72.7	77.4(53)	73.4(25)	77.5(30)

（　）内は資料数

第3表　橈骨、尺骨の計測値と示数

		朝日 SZ・01		土井ヶ浜	吉胡	近畿
		弥・中		弥・前	縄・晩	現代
橈骨		左	右	左	左	左
1	最大長	246		232.8(17)	227.7(28)	222.7(30)
2	生理長	236		219.6(20)	214.4(28)	207.2(30)
3	最小周	39	39	42.7(36)	48.5(44)	41.2(30)
4	骨体横径	15	15	17.0(39)	19.4(43)	16.3(30)
4a	中央横径	13	15	15.8(30)		
5	骨体矢状径	12	11	12.0(39)	13.0(43)	11.6(30)
5a	中央矢状径	11	10	10.6(27)		
5(5)	中央周	40	41			
6	骨体弯曲	2.3		3.2(23)	2.5(13)	2.7(30)
7	顆体角	170	168	166.7(27)	171.2(13)	168.4(30)
3／2	長厚示数	16.5		19.4(19)	22.6(28)	20.0(30)
5／4	骨体断面示数	80.0	73.3	70.4(39)	67.8(43)	70.6(30)
	橈骨上腕骨示数	76.9		74.3*	77.6(14)	71.5(30)
尺骨						
6	尺骨頭幅	23	23	25.2(30)		25.6(30)
7	尺骨頭深	24	23	25.5(35)		24.3(30)
11	前後径		12	13.3(40)	15.1(51)	12.5(30)
12	横径		16	15.4(28)	16.6(51)	15.4(30)
13	上横径	19	19	19.1(43)		19.8(30)
14	上前後径	23	23	25.8(38)		26.5(30)
15	尺骨角	82	77			85.4(30)
7／6	尺骨頭深示数	96.0	100.0	101.3(29)		95.0(30)
11／12	骨体断面示数		75.0	78.5(40)	92.2(47)	81.3(30)
13／14	扁平示数	82.6	82.6	74.4(37)	82.4(53)	75.8(30)

（　）内は資料数
＊平均値から算出

第4表　大腿骨、膝蓋骨の計測値と示数

		朝日 SZ-01		土井ヶ浜	吉胡	近畿
		弥・中		弥・前	縄・晩	現代
大腿骨		左	右	左	左	左
1	最大長	439	438	438.3(15)	420.2(20)	413.7(30)
2	自然長	429	435	428.7(15)	417.8(19)	410.2(30)
3	転子顆長	425		422.4(13)	405.4(17)	392.7(30)
4	自然位転子長	405		415.8(13)	395.3(17)	388.5(30)
5	骨幹長	354		342.5(11)	330.1(25)	325.5(30)
6	中央矢状径	27	27	28.6(53)	29.8(66)	26.8(30)
7	中央横径	27	27	26.6(53)	26.0(66)	25.6(30)
8	中央周	84	86	87.4(54)	89.2(66)	83.1(30)
9	骨体上横径	30	29	32.9(51)	30.2(47)	29.4(30)
10	骨体上矢状径	24	24	25.8(51)	25.0(48)	24.6(30)
14	前顎及び頭長	71	72	70.8(24)		73.1(30)
15	顎垂直径	33	33	33.6(22)	30.4(26)	32.8(30)
16	顎矢状径	25	26	27.1(22)	25.1(26)	25.4(30)
17	顎周	94		99.3(21)	92.1(26)	94.2(30)
18	頭垂直径	43	43	45.2(22)	44.0(19)	45.3(30)
19	頭横径	43	43	45.5(21)	43.8(23)	44.8(30)
20	頭周	(140)		144.1(17)	141.9(16)	142.5(30)
22	外顆厚	61		62.4(11)	59.9(34)	60.3(30)
23	外顆最大長	62	62	63.1(10)	59.8(20)	60.6(30)
24	内顆最大長	(61)	62	62.2(9)	60.7(17)	58.8(30)
25	外顆後高	34	35	36.9(17)		
26	内顆後高	38	36	36.8(17)		
27	骨体弯曲	2.5	3.1	4.1(15)	4.1(36)	3.3(30)
28	捻転角	22	14	18.8(16)	22.9(17)	11.0(30)
29	顎体角	129	129	127.2(24)	126.2(45)	131.3(30)
30	顆体角	77	80	80.6(17)	81.2(25)	79.8(30)
8 / 2	長厚示数	19.6	19.8	20.5(15)	21.9(19)	20.3(30)
6 / 7	中央断面示数	96.3	100.0	107.7(53)	114.8(66)	106.4(30)
10 / 9	上骨体断面示数	80.0	82.8	79.4(51)	83.5(47)	84.3(30)
16 / 15	顎断面示数	75.8	78.8	80.3(22)	83.5(42)	78.1(30)
19 / 18	頭断面示数	100.0	100.0	101.4(21)	99.9(30)	98.4(30)
上腕骨最小周 / 大腿骨中央周*		70.2		73.8*	74.7*	76.9*
膝蓋骨						
1	最大高	35	(35)		39.9(34)	41.2(30)
2	最大幅	40	40		44.3(35)	43.7(30)
3	最大厚	20	19		19.5(35)	19.7(30)
1 / 2	高幅示数	87.5	87.5		90.0(34)	94.6(30)

(　)内は資料数
＊平均値から算出

第5表　脛骨、腓骨の計測値と示数

		朝日SZ・01		土井ヶ浜	吉胡	近畿
		弥・中		弥・前	縄・晩	現代
脛骨		左	右	左	左	左
1	全長	359	361	351.0(9)	342.7(26)	327.2(30)
1a	最大長	366	368	356.6(9)	346.8(25)	331.8(30)
1b	脛骨長	355	356	346.4(10)	336.2(23)	321.9(30)
2	顆距間長	341	343	321.0(10)	333.8(23)	313.0(30)
3	最大上端幅		70	74.5(9)	73.7(30)	75.3(30)
6	最大下端幅	45	48	46.8(13)	48.1(34)	47.0(30)
7	下端矢状径	35	35		37.1(47)	36.0(30)
8	中央最大径	27	26	29.6(50)	31.0(60)	28.5(30)
8a	栄養孔部最大径	28	29	34.4(45)	34.2(55)	32.6(30)
9	中央横径	18	20	21.2(50)	21.0(61)	21.0(30)
9a	栄養孔部横径	20	21	24.0(52)	23.3(54)	23.6(30)
10	骨体周	73	74	81.4(50)	84.7(61)	79.0(30)
10a	骨体周	79	81	93.2(45)	93.4(54)	89.3(30)
10b	最小周	67	69	74.8(44)	77.8(54)	71.1(30)
11	弯曲	1.8	1.7	1.4(31)	1.7(38)	1.5(30)
12	後傾角	10	8	8.3(6)	19.2(21)	12.6(30)
13	傾斜角	7	5	4.5(6)	13.2(21)	8.5(30)
14	捻転	12	14	19.4(9)	17.5(21)	12.4(30)
10b／1	長厚示数	18.7	19.1	20.8(10)	22.7(26)	21.8(30)
9／8	中央断面示数	66.7	76.9	70.9(50)	67.5(60)	73.7(30)
9a／8	脛示数	71.4	72.4	69.5(45)	68.0(54)	72.4(30)
	脛骨大腿骨示数	82.8	81.8	80.8*	82.2(10)	78.5(30)
脛骨最大長／大腿骨最大長*		83.3	84.0	81.4	82.5*	80.2
腓骨						
2	中央最大径	15	15	16.5(29)	18.8(52)	13.7(30)
3	中央最小径	10	10	10.7(29)	11.8(52)	10.4(30)
4	中央周	43	43	44.5(29)	52.8(52)	41.1(30)
3／2	中央断面示数	66.7	66.7	68.3(26)	63.6(52)	76.5(30)

（　）内は資料数
＊平均値から算出

第6表　各地弥生人骨の下顎骨計測値（男性）

		東海			北部九州・山口				四国	西北九州
		朝日SZ・01	朝日8号土壙	高蔵	土井ヶ浜	三津	金隈	吉母浜	二塚山	釈迦面山	深堀
66	下顎角幅	90		113 (1)	106.8	106.1(4)	108.8(14)	101.8(4)	114.5(2)	106 (1)	
68	下顎長	76		71 (1)	76.0	71.8(4)	73.2(17)	77.5(4)	67.3(3)	80 (1)	75.3(3)
69	オトガイ高	30		33.0(2)	33.3	33.9(17)	33.8(23)	34.0(2)		27 (1)	30.7(3)
69(1)	下顎体高	32	28.5(1)	30.5(2)	31.6	32.4(17)			33.6(9)		
69(3)	下顎体厚	13	15 (1)	13.0(2)	13.0				14.1(11)	13 (1)	
70	枝高	54		65 (1)	62.2	65.6(7)	64.8(6)	63.5(4)	64.8(5)	58 (1)	61.0(3)
70(3)	下顎切痕高	13		13 (1)	14.5	14.2(8)			15.6(5)		
71	枝幅	34		36 (1)	36.4	36.1(10)	37.0(12)	36.3(4)	35.6(8)	37 (1)	34.3(3)
71(1)	下顎切痕幅	36		33 (1)	36.1	35.5(8)			37.6(5)		
79	下顎角	122		123 (1)	123.9	121.3(9)	118.9(17)	121.0(4)	124.2(6)	121 (1)	124.0(3)
69(3)／69(1)	下顎体高厚示数	40.6	52.6(1)		41.4						
71／70	下顎枝示数	63.0		55.4(1)	58.5	55.3(7)	58.9(6)	57.1(4)	54.3(5)	63.8(1)	56.4(3)
70(3)／71(1)	下顎切痕示数	36.1		39.0(1)	40.2	40.1(8)			41.7(5)		

（　）内は資料数

第7表　各地弥生人骨の鎖骨、上腕骨計測値（男性、左）

		東海		北部九州・山口						四国		西北九州	
		朝日SZ-01	高蔵	土井ヶ浜	三津	金隈	吉田汲	中ノ浜	二塚山	釈迦面山		大友	宮の本
鎖骨													
4	中央垂直径	10	10.5 (2)		10.4(10)								
5	中央矢状径	13	12.5 (2)		13.3(10)								
6	中央周	37	36.0 (2)		39.7(10)					29 (1)			
4 / 5	骨体断面示数	76.9	82.2 (2)		79.2(10)								
上腕骨													
1	最大長	311	281 (1)	299.4	306.3(3)	304.5(4)	288.5(2)	320.7(3)	300 (2)*	(296)(1)*		291.4(11)	305 (1)
2	全長	307		295.4	299.5(2)	304.0(2)	286.0(2)	304.3(3)*	296.5(2)*	293 (1)*		285.8(8)	300 (1)
3	上端幅	43	47 (1)	49.0	56 (1)								
4	下端幅	54	55 (1)	60.5	60 (1)								
5	中央最大径	21	23 (1)	22.6	23.4(13)	23.6(12)	23.0(3)	22.7(8)	24.1(12)*	20 (1)*		23.4(34)	24.3(6)
6	中央最小径	15	17 (1)	17.2	18.0(13)	17.1(12)	17.0(3)	17.5(8)	17.9(12)	14 (1)*		17.6(33)	19.5(6)
7 a	最小周	59	62 (1)	64.5	65.5(13)	65.3(14)	61.7(3)	63.8(8)	65.9(9)*	54 (1)*		63.5(33)	66.3(6)
7	中央周	62	66 (1)			68.3(12)	66.3(3)	66.5(6)	69.9(12)*	58 (1)*		68.2(33)	72.7(6)
7 / 1	長厚示数	19.0	22.1(1)	21.3	22.1(3)	21.9(4)	20.9(2)	19.6(2)	21.3(2)*	(18.2)(1)*		22.4(11)	22.0(1)
6 / 5	骨体断面示数	71.4	73.9(1)	77.4	77.3(13)	72.7(12)	74.1(3)	77.3(8)	76.5(2)*	70.0(1)*		75.0(33)	80.1(6)

（ ）内は資料数
＊右

第8表　各地弥生人骨の橈骨、尺骨計測値（男性、左）

		東海		北部九州・山口					四国		西北九州	
		朝日SZ-01	高蔵	土井ヶ浜	三津	金隈	吉母浜	中ノ浜	釈迦面山		大友	宮の本
橈骨												
1	最大長	246	192 (1)	232.8	252 (1)	238.8(12)	223.3(3)	246.6(5)			231.5(6)	237 (1)
2	生理長	236		219.6	237 (1)	220.0(9)	207.0(3)	231.0(3)			215.8(9)	221 (1)
3	最小周	39		42.7	42.7(6)	42.6(17)	42.0(3)	41.7(9)			44.7(15)	43.7(3)
4	骨体横径	15		17.0	16.9(7)	17.1(17)	18.3(3)	17.0(9)	16(1)*		17.1(25)	16.9(8)
4 a	中央横径	13	17 (1)	15.8		16.3(16)	16.3(3)	16.0(4)			16.4(25)	16.9(7)
5	骨体矢状径	12		12.0	12.3(7)	12.3(17)	12.0(3)	12.1(9)	10.5(1)*		12.4(25)	12.6(8)
5 a	中央矢状径	11	12 (1)	10.6		12.4(16)	12.0(3)	12.8(5)			12.4(26)	12.9(7)
5(5)	中央周	40	47 (1)								45.9(23)	48.0(5)
3 / 2	長厚示数	16.5		19.4	19.0(1)	19.2(9)	20.3(3)	18.6(3)			20.5(5)	19.9(1)
5 / 4	骨体断面示数	80.0	67.6(1)	70.4	72.5(7)	71.9(17)	65.5(3)	71.6(9)	65.6(1)*		72.3(25)	73.4(8)
5 a / 4 a	中央断面示数	84.6	40.6	67.1**		71.1(16)	73.4(3)	80.1(4)			75.2(25)	77.0(6)
橈骨最大長 / 上腕骨最大長**		79.1	68.3	77.8	82.2	78.4	77.4	76.9			79.4	77.7
尺骨												
11	前後径	12*	14(1)*	13.3	13.6(11)	13.1(23)	13.3(3)	13.1(7)			15.0(26)	14.8(6)
12	横径	16*	18(1)*	15.4	17.7(11)	16.8(23)	15.7(3)	17.9(7)			17.3(26)	17.5(6)
11 / 12	骨体断面示数	75.0*	77.8(1)*	78.5	76.5(11)	78.6(23)	86.9(3)	72.6(7)			88.0(26)	84.9(6)

（ ）内は資料数
＊右
＊＊平均値から算出

第9表　各地弥生人骨の大腿骨計測値（男性、左）

		東海	北部九州・山口						四国	西北九州	
		朝日SZ-01	高蔵	土井ヶ浜	三津	金隈	吉母浜	中ノ浜	二塚山	釈迦面山	大友	宮の本
1	最大長	439		438.3	429.5(6)	438.6(11)	413.5(2)	432.7(6)	441.3(7)*		420.1(15)	450 (1)
2	自然長	429		428.7	422.0(6)	438.0(7)	409.0(2)	426.0(2)*	441.0(3)*		413.9(7)	445 (1)
6	中央矢状径	26	29.0(2)	28.6	30.3(6)	29.4(3)	28.3(3)	29.4(4)	30.4(5)*	25 (1)	28.6(4)	27.6(8)
7	中央横径	27	28.0(2)	26.6	27.6(6)	27.7(3)	28.7(3)	27.1(4)	28.1(6)*	28.5(1)	26.4(2)	26.4(8)
8	中央周	84	87.5(2)	87.4	92.4(6)	90.0(3)	90.7(3)	89.0(3)	91.8(5)*	83 (1)	87.0(4)	85.5(8)
9	骨体上横径	30	32 (1)	32.9	31.7(6)	32.9(4)	33.7(3)	31.8(5)	32.2(2)*	34.5(1)	31.6(8)	31.4(8)
10	骨体上矢状径	24	24 (1)	25.8	29.8(6)	25.8(4)	26.0(3)	26.1(5)	26.6(2)*	20.5(1)	25.2(8)	23.4(8)
8 / 2	長厚示数	19.6		20.5	22.5(6)	21.1(7)	21.5(2)	20.5(2)*	21.3(3)*		21.4(6)	19.8(1)
6 / 7	中央断面示数	96.3	103.6(2)	107.7	111.3(6)	105.5(3)	100.1(3)	106.9(4)	108.7(5)*	87.7(1)	108.6(4)	105.0(8)
10 / 9	上骨体断面示数	80.0	75.0(1)	79.4	94.5(6)	78.7(4)	78.0(3)	82.8(5)	82.5(2)*	59.4(1)	80.1(3)	74.6(8)
上腕骨最小周 / 大腿骨中央周**		70.2	71.5(2)	73.8	70.9	70.7	68.0	71.7	71.8*	65.1	73.0	77.5

( )内は資料数
＊右
＊＊平均値から算出

第10表　各地弥生人骨の脛骨、腓骨計測値（男性、左）

		東海	北部九州・山口					四国		西北九州	
		朝日SZ-01	土井ヶ浜	三津	金隈	吉母浜	中ノ浜	二塚山	釈迦面山	大友	宮の本
脛骨											
1	全長	359	351.0	346.8(4)	329.7(3)	333.3(3)	349 (1)	355.7(3)*		345.3(10)	341 (1)
1a	最大長	366	356.6	347.6(7)	345.3(11)	338.7(3)	354.7(3)	358.6(5)*		354.8(11)	346 (1)
8	中央最大径	27	29.6	32.0(14)	31.6(17)	29.8(4)	32.0(6)	31.0(20)*	26.5(1)	31.0(13)	30.0(6)
8a	栄養孔部最大径	28	34.4	37.7(17)	36.0(29)	35.8(4)	35.5(10)	35.4(17)*	31 (1)	34.5(5)	34.8(6)
9	中央横径	18	21.2	23.2(14)	22.9(17)	22.3(4)	22.5(6)	22.5(20)*	19 (1)	21.4(3)	20.5(6)
9a	栄養孔部横径	20	24.0	26.0(17)	25.5(29)	25.0(4)	25.0(10)	25.0(16)*	22 (1)	23.3(6)	22.7(6)
10	骨体周	73	81.4	89.5(14)	85.4(17)	82.0(4)	86.5(6)	84.2(20)*	71 (1)	83.4(1)	81.0(6)
10a	骨体周	79	93.2	102.8(17)	97.2(29)	95.5(4)	94.7(10)	95.8(16)*	83 (1)	92.6(4)	91.8(6)
10b	最小周	67	74.8	81.6(13)	77.5(26)	75.5(4)	76.5(11)	76.6(11)*		75.6(8)	76.4(5)
10b / 1	長厚示数	18.7	20.8	23.5(3)	23.5(3)	22.5(3)		23.3(3)*		21.9(10)	22.9(1)
9 / 8	中央断面示数	66.7	70.9	73.0(14)	72.7(17)	74.9(4)	70.4(6)	72.7(20)*	71.7(1)	69.1(4)	68.4(6)
9a / 8a	脛示数	71.4	69.5	68.9(17)	71.2(29)	70.1(4)	70.5(10)	70.9(16)*	71.0(1)	67.7(5)	65.1(6)
脛骨最大長 / 大腿骨最大長**		81.8	81.4	80.9	78.7	80.6	80.7	80.6*		84.5	75.8
脛骨骨体周 / 大腿骨中央周**		86.9	93.1	96.9	94.9	90.4	97.2	91.7*	85.5	95.9	94.7
腓骨											
2	中央最大径	15	16.5	17.2(8)	17.0(3)	17.5(4)			13.5(1)		16.0(5)
3	中央最小径	10	10.7	11.1(8)	11.3(3)	12.0(4)			9.5(1)		11.4(5)
4	中央周	43	44.5	48.8(8)	46.3(3)	49.0(4)			38 (1)		45.6(5)
3 / 2	中央断面示数	66.7	68.3	64.7(8)	67.0(3)	68.6(4)			70.4(1)		71.4(5)
大腿骨最大長からの推定身長(cm)		163.8	162.8(18)	162.0(7)	162.7(17)	159.1(2)	163.6(10)	164.3(7)	155.1(1)	159.1(15)	165.9(1)

( )内は資料数
＊右
＊＊平均値から算出

図版Ⅰ　人骨出土状態・下顎骨



3号主体部人骨出土状態▲◀



下顎骨　前面観▶　側面観▲　上面観▼







図版Ⅱ　四肢骨（前面）



肩甲骨・鎖骨・上腕骨



橈骨・尺骨



大腿骨・膝蓋骨



脛骨・腓骨